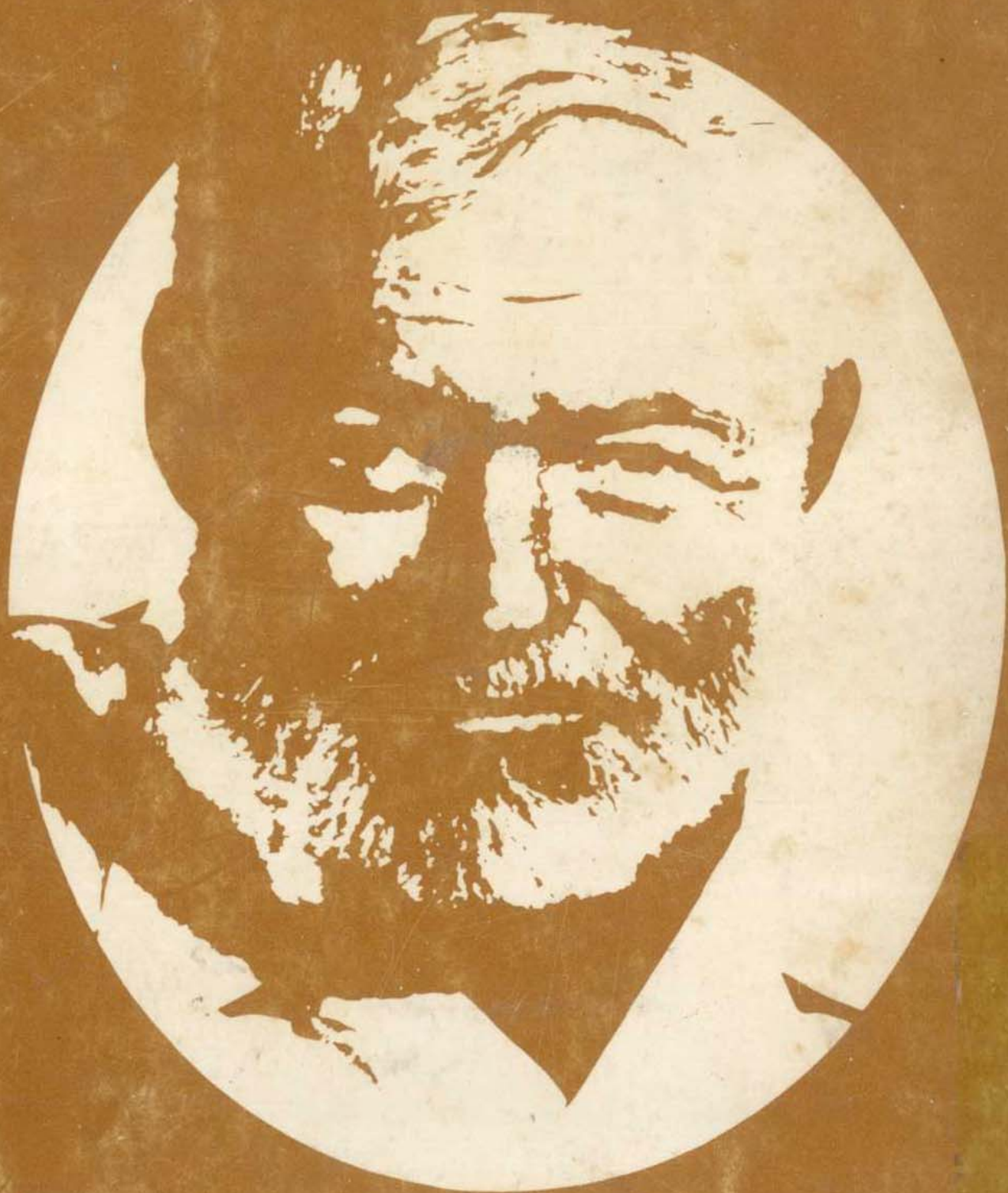


E. HEMINGWAY

武器よさらば

大久保康雄訳



武器よさらば



定価は帯またはカバー
に表示してあります。

新潮文庫 赤100 C

昭和三十年三月二十日 発行
昭和四十六年十月三十日 四十三刷

訳者 大久保康雄

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

武 器 よ さ ら ば

ヘミングウェイ
大久保康雄訳



武器よさらば

第一編

第一章

その夏の末、われわれは、ある村の民家ですごした。その村は河と平野をへだてて山々と向かいあっていた。河原には、小石や丸石があり、陽に乾いて白っぽくなっていた。水は、いくすじにもわかれ、澄んで、流れも速く、青々としていた。部隊がいくつも家の側を通りすぎ、街道をくだって行った。彼らの巻きあげるほこりが、木々の葉に白い粉をふりかけた。木々の幹までがほこりにまみれていた。その年は落葉も早かった。だから、われわれは、部隊が街道を行進するのと、ほこりが舞いあがるのと、木の葉が微風にそよいでは舞い落ちてくるのと、それから行進する兵隊と散った木の葉のほかは人影もない白い街道とをながめて暮らした。

平野は豊かに作物が実っていた。果樹園がたくさんあった。だが平野の向こうの山々は褐色に上げていた。山では戦闘が行なわれていた。夜になると砲火の閃くのが見えた。暗闇のなかで、それは夏の稲妻のようであった。けれども夜は涼しく、嵐がくるような気配はなかった。

ときには、暗闇のなかに、窓の下を行進する部隊や、トラクターにひかれて大砲の通りすぎる音などがきこえた。夜間は往来がはげしかった。騾馬が荷鞍の両わきに弾薬箱をつんでぞくぞくと通り、兵隊を運ぶ灰色のトラックが行き、そのほかズックのおおいをかけて貨物をつんだト

ラックも、速力を落とし、往来を縫って、のろのろと進んで行った。昼間でもトラクターに曳かれて大型の大砲が通りすぎた。そのながい砲身は、青い枝でおおわれ、トラクターの上にも青い葉のついた枝や蔓草つるくさがのせてあった。北のほうには溪谷を越えて栗林が見え、その背後の、河の手前側に、山が一つ見えた。ここでも、その山を占領しようとして戦闘が行なわれたが、これは成功しなかった。秋になって雨季がくると、栗の木の葉はすっかり落ちて、枝がむきだしになり、幹は雨で黒ずんだ。ぶどう畑も葉がまばらになって、枝だけが目立った。この地方一帯が、じめじめと濡れそぼち、褐色となり、秋の季節にくさったようになった。河には霧もやがたちこめ、山には雲がたれこめた。道行くトラックは泥濘でねをはねとばし、部隊の兵はマントを泥だらけにしてびしょ濡れになっていた。銃も濡れていた。マントの下にはベルトの前部に二個の革製の弾薬箱がついており、そのなかには細長い六・五ミリの弾薬筒がいくつもつまっているのだが、この鼠色の革の箱がマントのなかでふくれているので、街道を歩いて行く兵士たちは、まるで六カ月の妊婦のようなすがたで行進していた。

おそろしい速力でぶつとばして行く灰色の小型自動車も何台もあった。たいてい運転手とならんで一人の将校が乗っており、さらに後部の座席に何人かの将校が乗っているのがつねだった。これらの自動車は、軍用トラックよりも、もっとひどく泥をはねとばして行った。もしも後部の座席にすわった将校のなかに、ひどく小柄な男がいて、二人の将官にはさまれ、あまり小さすぎて顔が見えず、わずかに帽子のてっぺんと狭い肩しか見えないようであつたら、しかもその自動車が特別に速力を出してぶつとばしているのであつたら、それはまず国王だと思つていい。彼は

ウーデイーネ(訳注 イタリア北東部の都市)に住んでいて、こうして毎日のように状況を視察にでかけてくるのだが、情況は、すこぶる思わしくなかった。

冬の季節にはいると共に長雨が訪れ、そして雨と共にコレラが訪れてきた。けれどもコレラのほうは食いとめられ、結局、軍隊でこいつにやられて死んだのは、わずか七千人にすぎなかった。

第二章

そのあくる年には幾多の勝利があった。溪谷と栗林のしげった山腹の向こうの例の山を占領した。また南方にあたる平野の向こうの高原でも幾度か勝利をおさめた。われわれは八月に河を越し、ゴリーツィア(訳注 イタリア北東部の都市。当時のイタリア軍の前線基地)の町の一軒の家に移った。塙をめぐらした庭には泉水があつて、たくさんの樹木が鬱蒼と茂っており、家の横には紫の藤がからんでいた。今度は、すぐその一マイルとは離れていない山地で戦闘が行なわれていた。町は、なかなか気持ちよかったし、われわれの家も、すこぶる快適だった。河が家の裏手を流れていた。町は、きわめて手際よく占領されたが、向こうの山地は、まだ占領できずにいた。オーストリア軍は、戦争がすんだら、いつかはまたこの町へ戻ってくるつもりらしく、それが私にはうれしかった。というのは、彼らは、この町を破壊するような砲撃はしておらず、作戦的に、ほんの申しわけ程度の砲撃しかしていなかったからだ。町の人たちも、そのまま町で暮らしていた。横町へはいれば、病院もカフェもあったし、砲兵隊もいた。淫売屋(いんばい)も二軒あった。一つは兵隊用、一つは将校用だ。夏の終わりと共に涼しい夜がつづいた。町の向こうの山地での戦闘。砲弾の跡のついた鉄橋。戦闘

のあった河っぶちの粉碎されたトンネル。広場をめぐる木々。その広場につづく長い並木道。そして町には女がいた。国王が自動車で通ると、このごろでは、時折り顔や、首の細長い小さなからだや、山羊髭みたいな白い顎鬚を見せて行くことがあった。そのうえ、砲弾に壁をぶち抜かれた家々の内部が、いきなりまる見えで、その庭には、ときには道路にまで、壁の漆喰や瓦礫が散らばっていた。そしてカルソー方面では万事うまくいっていた。すべてこういったところから、その秋は、われわれがいなかにいた去年の秋とは、たいへんなちがいであった。戦争も変化した。

町の向こうの山の櫟林も、いまはなくなってしまった。この林は、われわれが町へ移ってきた夏のころは青々としていたのだが、いまは切株や裂けた幹があるばかりで、地面は穴だらけになっていた。晩秋の一日、かつて櫟林のあったところへ出かけたが、見ているうちに、雲が一つ、山にかかってきた。雲の動きは非常に速く、太陽がどんよりと黄色くなったと思うと、満目ことごとく灰色になり、空は一面に暗くなった。雲は、なおも山を馳せおりてきて、いきなりあたりを包みこんだと思うと、雪だった。雪は横なぐりに風にとび舞い、むきだしの地面をおおい、木の切株だけがつき出していた。砲の上も雪だ。塹壕の後方の便所へ通う道が、いくつか雪のなかでできた。

しばらくして下の町へ戻ってからも、私は淫売屋の窓から外をながめて雪の降るのに見いていた。例の将校用のやつだ。その淫売屋で、仲間の一人とさし向かいで一びんのアスティ酒を酌かわしていたのであるが、ゆっくりと重そうに落ちてくる雪をながめていると、二人とも、これ

でこの年もすべておしまいだという気がした。河上の山地は、まだ奪取していないし、河向こうの山も一つとして占領していなかった。すべて翌年に持ち越した。いつも食堂で一緒になる従軍牧師が、表通りの雪のぬかるみを用心しいしい通りかかったのを友人が見つけ、窓をたたいて彼の注意を呼んだ。牧師は顔をあげた。われわれを見ると、にっこり笑った。友人が、はいってくるようにと身振りで示した。牧師は首をふって行ってしまった。その夜、食堂でスパゲッティのコースがすんだあと——スパゲッティとくると、みんな実に素早く、むだ口ひとつきかずに平らげた。スパゲッティをフォークですくいあげ、ぶらぶらするやつを、いったん高くもちあげてから口のなかへたらしこむか、さもなければ、ひっきりなしにすくいあげては口のなかへすすりこみ、ぶどう酒は苞に巻いた一ガロン入りの細口のびんから、めいめい勝手にやる。このびんは金属製の構架にぶらさげてあって、人さし指をびんの頸にかけて引きおろすと、透明の、赤い、渋味のある、うまいぶどう酒が、同じ手にささえたグラスに流れでるというわけである——こういうコースのすんだあと、大尉が牧師にからみはじめた。

牧師は若いので、すぐに顔をあからめた。われわれと同じように軍服をつけてはいるが、灰色の上衣の左の胸ポケットの上に暗赤色の天鵝絨の十字架をつけている。大尉は私によくわからせようと、一語でもわからぬところがあつてはならぬとでもいうように、わざわざ私のために、（ためになつたかどうか怪しいものだが、）片言のイタリア語をしゃべった。

「牧師は、きょう、女たちと一しょね……」

大尉は、牧師と私をかわるがわる見ながら言った。牧師は薄笑いして、顔をあからめ、首をふ

った。この大尉は、よく彼をいじめるのである。

「ちがうか？ きょう、牧師が女と一しょにいるのをおれは見た」

「ちがいます」と牧師は言った。ほかの将校たちは、牧師がいじめられるのを面白がって見ていた。

「牧師、女たちと一しょ、ない」と大尉はつぶけた。「牧師、絶対に女たちと一しょ、ない」と、これは私に向かつての説明だ。彼は私のグラスをとって酒をつぎ、そのあいだも私の目から視線をはなさなかったが、牧師からも目をはなさなかった。

「牧師さん、毎晩、一人で五人」食卓にいた人々が、みんな、どっと笑った。「わかるかね？ 牧師さん、毎晩、一人で五人」彼は、ある種の身振りをしてみせ、大声で笑った。牧師は、それを冗談とうけとって何もいわなかった。

「ローマ法王はオーストリア軍の戦勝を望んでいるんだ」と少佐が言った。「法王はフランツ・ヨーゼフ（訳注 当時のオーストリア皇帝）がごひいきなんだ。金の出どころもそこなのだからね。こっちは無神論者にもなるわけだ」

「『黒い豚』を読んだかね」と中尉がきいた。「一部手に入れてあげよう。この本のために、おれは信仰がぐらついたのだ」

「あれは汚けがらしい下劣な書物です」と牧師が言った。「まさかあなたは本気であの本が好きだとおっしゃるのではないでしょうね」

「あれは実に立派なものだよ」と中尉が言った。「世の牧師連中の真相がよくわかる。君なら、

きつと気に入るだろう」と私に向かって言った。私は牧師に笑いかけた。彼は、ろうそくの向こうから、ほほえみ返した。

「お読みになつてはいけませんよ」と彼は言った。

「君にも一部手に入れてやろう」中尉が言った。

「心ある人間は、みな無神論者さ」と少佐が言った。「といってフリー・メーソンの結社を信じるわけにはいかないがね」

「自分はフリー・メーソンを信じます」と中尉が言った。「あれは立派な団体です」

だれかがはいってきた。扉があいたとき、雪の降っているのが見えた。

「雪になったから、もう攻撃も中止でしょうね」と私が言った。

「中止さ」少佐が言った。「休暇をとるんだね。そして行つてくるといい、ローマだとかナポリ、シシリー——」

「ぜひともアマルフィ見物をやらぬといかん」と中尉が言った。「アマルフィにいるおれの家族に紹介状を書いてやろう。息子^{むすこ}みたいにかわがってくれるぞ」

「パレルモへも行かなくてはいいかな」

「カプリへも行かなければだめだ」

「アブルツィを見物して、カブラコッタにいる私の家を訪ねていただきたいものです」と牧師が言った。

「おい、みんな聞けよ、牧師がアブルツィの話をしているぞ。あすこは、ここよりも雪が深い

んだ。こいつは百姓なんぞ見たいと思ってやしないよ。文化と文明の中心地に行かせるべきだよ」

「美人がおらんことには話にならん。ナポリのそういうところを書いてやろう。美人で若い娘たちが、わんさというぞ——ただし、やりてばあがついているけどな。はははは！」大尉は片手を開き、影絵をやるときのように、親指をぴんと立て、ほかの指を突きだした。壁の上に、その手の影がうつった。彼はまた片言の変則イタリア語を使いだした。

「君は、こんなふうにして出かける」と親指をさしてみせた。「そして、こんなふうになって帰ってくる」と今度は小指にさわってみせた。みんな笑いだした。

「見ろ」大尉が言って、また手をひろげた。ふたたびろうそくの光で壁に影がうつった。彼は、

ぴんとおっ立てた親指からはじめて順々に親指と四本の指の名を言って行つた。少尉（親指）、

中尉（人さし指）、大尉（中指）、少佐（薬指）、中佐（小指）。君は、少尉（親指）、

そして中佐（小指）になって帰ってくる！」人々は、どっと笑った。大尉の指のゲームは大当たりをとつ

たのだ。彼は牧師のほうを見て一段と声をはりあげた。「毎晩、牧師は一人で五人！」人々は、またどっと笑った。

「君はすぐに休暇をとって行くんだな」と少佐が言った。

「おれも一しよに出かけて案内してやりたいよ」と中尉が言った。

「帰りに蓄音機を持ってきてくれ」

「いい歌劇のレコードを頼むぞ」

「カルーソーを持ってこいよ」

「カルーソーなんか持ってきたらだめだぞ。あいつのは、ただほえるんだ」

「ほえるのも、あのくらいになったらいいとは思わんか」

「あいつときたらほえるんだ。本当だ、ただ、ほえるだけだ！」

「アブルツィへおいでになるといいんですがね」と牧師が言った。ほかの連中は何か口々にどなっていた。

「すばらしい獵りようができますよ。土地の人も、あなたの氣にいます。寒いですが、天氣はいいし、乾燥しています。私の家に泊まってください。父は獵にかけては名人です」

「さあ」と大尉が言った。「淫売屋へ行こうぜ。店のしまらんうちにな」

「おやすみ」と私は牧師に向かって言った。

「おやすみなさい」と牧師が言った。

第三章

私が前線に戻ってみると、われわれの部隊は、まだその町にいた。この付近いったいに砲の数
はさらにふえていた。春になっていた。畑地は青々としており、ぶどうの木は小さな緑の新芽を
ふきだし、路傍の木々も小さな葉をつけ、微風が海から吹いていた。私は、なじみの町を、あら
ためて眺めた。丘があり、その頂上に古城があり、丘をかこんで盆地があり、さらにそれを取り
かこむ丘陵があり、その向こうには山々がつらなっていた。そして、赤い地膚はだの山々の斜面も、

いくらか青く色づいていた。町にも砲がふえていた。いくつかの病院が新しくでき、町ではイギリス人の男や、ときには女も見かけられ、砲弾にやられた家は何軒かふえていた。暖かくなつて、いかにも春らしい日よりだった。塀にさす陽光にぬくもった木の間の小道をくだって行つたが、見ると、仲間は、相かわらずもとの家におり、家は私が発つたときと、すこしも様子が変わっていなかった。玄関はあけ放しになっていて、一人の兵隊が表のベンチに腰かけて日向ぼっこをしており、傷病兵運搬車が脇玄関のそばにとまっていた。はいつていくと、大理石の床と病院の臭気が鼻にきた。ただ季節が春になっていゝのがちがうだけで、何もかも私の発つたときのままだ。大きな部屋の入口からのぞきこむと、少佐が机に向かつて腰かけており、窓はあけ放してあつて、日光が部屋のなかまでさしこんでいた。彼は私のほうを見ようとしなかった。なかにはいつて報告したものか、それとも、ひとまず二階へあがつて身体を洗つたものかと私は迷つた。二階へあがることにきめた。

私がリナルディ中尉と一しよに使っている部屋は中庭に面していた。窓があけてあり、私の寝台は、きちんと毛布をひろげて、ととのえてあつた。所持品は壁にかかつていた。細長いブリキ罐に入れてある防毒面も鉄兜も同じ釘にかかつていた。寝台のあしもとには私の軍用トランクが置いてあり、その上に防寒靴がのせてあつた。革が油でぴかぴか光っていた。藍色に塗つた八角形の銃身に、つやつやした黒っぽいくるみ材でつくつた銃床のオーストリア式狙撃銃が、二つの寝台の上にかかつていた。それにとりつける照準望遠鏡が、トランクのなかにしまいこんであつたのを思いだした。中尉のリナルディは自分の寝台で眠りこんでいた。私が部屋にはいつた足音

で彼は目をさまし、起きなおった。

「やあ、どうだった」と彼が言った。

「すばらしかったよ」

私たちは握手した。彼は私の首に腕をまわして接吻^{せつぶん}した。

「うッうう」と私は言った。

「きたねえな」と彼は言った。「洗ってこいよ。どこへ行って、何をしてきたんだ。さっそく聞こうじゃないか」

「あちこち行ってきたよ。ミラノ、フロレンス、ローマ、ナポリ、ヴィラ・サン・ジョヴァンニ、メッシーナ、タオルミーナ——」

「まるで汽車の時間表みたいだな。何かすばらしいロマンスはなかったか」

「あったよ」

「どこで」

「ミラノ、フロレンス、ローマ、ナポリ——」

「もういい。どこが一番よかった」

「ミラノだな」

「それは、そこがはじめてだったからさ。どこで彼女に会ったのだ。コーヴァ^{（訳注）カフェ・コ}のスカラ座^{（の）}でか。どこへ出かけたんだ。どんな気持ちだった。早くすっかり話してきかせろよ。朝まで泊まっていたのか」